

豊かな社会と 家族愛のパラドックス

春日キスヨ
kasuga kisyu



●現代の若者の生き難さ

「何かしなければいけない。しかし、何をしたいかわからない。目的がみつからない。どう生きていけばよいかわからない」「人間関係がづらい。わからない。信じられない」。学校にも行けず、仕事にも就けず、「人間が怖い」と言って「引きこもり」状態にある青年たちから、こうした言葉を何度聞いたことがあるか。人は、「自分しなければならぬことがある」という課題や目的をもつとき、さらに「他の誰も見放しても、この人だけは自分を見放さない」という他者とのつながりの確信をもつとき、生き生きとした現在いまを生きていることができる。しかし、この感覚とともに失ったとき、果てしない「虚無」に襲われる。

「課題と目的」をもつことよって過去から現在、そして未来へと自己感覚はつながり、人との深いつながりが人生に喜びをもたらす。そして「引きこもり」状態にある青年たちが、「何をしたいかわからない。目的がない」「人間関係がづらい。信じられない」と訴えている事実は、彼ら・彼女らがこのふたつのつながりの感覚を見失い、深い虚無の淵にあることを意味している。

しかし、こうした訴えに対して親や教師等、上の世代の大人たちが返す言葉は一樣に同じである。「人間関係がうまくいかないなんて当たり前だ。努力もなしにうまくいくはずがない」「甘えたことを言うな。目的は自分で生み出すものだ」。上の世代の大人たちには、下の世代の苦悩は伝わりがたい。そして、このような世代間ギャップは、「引きこもり」の状態にある一部の若者たちと大人世代のギャップとしてあるだけではなく、一般の若者とその親・教師の関係の間にも共通にみられるものである。

たとえば、ケータイを片時も手放せない若者たちは言う。「メールがひとつも入ってこなかったら、世界から見放されたような気になる」と。メール一通入らなければ「世界から見放されたような気になる」なんて。誰かとの深いつながりの確信があれば、そのような揺らぎはないはずだ。何という低い自己信頼感。しかし、そうした若者に対して大人たちは言う。「ケータイにしがみつくと暇があったら勉強でもせよ」「電話代はタダではない」等々。一方的に批判するだけで、ケータイにしがみつかざるを得ない世代の自己の揺らぎや、目的や課題をもてない生き難さなどに思いを馳せることはない。

このような世代間ギャップの背景には、戦後、日本の社会が急速に変貌を遂げてきたと

いう要因が関わっている。人格形成期におけるモノとの関わり方の違いが、世代間で大きく異なる自己意識を生んでいるのだ。欲望の対象たるモノとの関わりで言えば、若者世代の祖父母が生まれ育った時代は、戦中から戦後の「窮乏の時代」であり、親世代が生まれ育ったのは、「希望の時代」とでも言うべき高度経済成長期であり、さらに、若者世代が育った時代は、すでに必要なモノは手に入れた上に、個人消費の増大こそが日本経済を支えるという、モノ溢れの「充足の時代」だと言えるだろう。

若者世代が生まれ育った豊かな社会は、人間の生き難さの質をどのようなものとして規定してくるのか。臨床心理学者・河合隼雄は、「現代人の悩みは深くなっているか」という新聞記者の問いに対して、次のように答えている。「それは完全に。もう四十年そういう人たちと会っていますが、だんだん深まっていく。なんでかといったら表層の問題が解決したからです」（朝日新聞、一九九七年九月九日）。

また、アウシュビッツを生き延びた精神医学者のV・フランクルも次のように言う。「現代人は劣等感にそれほど悩んではいません。もうとつくに、劣等感よりも、底知れない無意味感の方が際だっているのです。一般に現代人は、生きていけるだけの手段は持っている

ますが、何のために生きるのかという目的がわからなくなっています」（『宿命を超えて、自己を超えて』春秋社、一九九七年）。

なぜ、生活苦という「表層の問題」が解決されることが人間（とりわけ若者たち）の「悩みを深く」し、「底知れない無意味感」を生じさせていくのか。社会学者・見田宗助は、高度経済成長期が始まったばかりの一九六二年当時、新聞投書欄に現代の若者が抱え込んでいる苦悩と同質の悩みを見出し、それを「古典的な幸福像（生活苦からの解放、物質的欲求の充足状態）の逆説的な性格が、欲望のいったん解放された今日の状況の中で歴史上初めて純粹な姿において、したがってまた、感性的に（実感）可能なたちで民衆の前に現れている」現象とみなした（『現代日本の精神構造』弘文堂、一九六五年）。

すなわち、貧窮な時代を生きる人間にとつての目的や課題とは、「今日一日生きしのぐ」という外的条件に規定されたものとしてあり、自己の人生はそのための手段としてのみあった。そうした時代、個人には主体的、内発的に目標を設定し、人生を設計していく力は求められなかった。生活苦という社会的条件が、強制的課題指向とでも呼べる生き方を個人に強いたので。しかし、豊かな社会になるにつれ、こうした生き方の基盤そのものが変化し、別の形の人生の目的・課題をもって生きる必

要性を生んでいく。そして、高度経済成長長期以降の日本人に、「感性的に(実感)可能なかたち」で訴えられ始めたのが、そうした変化に伴う生き難さなのだと言えよう。そして、若者世代がひろく感知し、訴えているのもまさにこの種のものなのである。

親による庇護の下で、受験競争に勝つという「外的必要性」によって規定された生活目標「を追い場から降りた途端、若者たちは新たな課題・目標(生きる意味)を生み出さねばならないからである。しかし、それを見出すのは容易ではない。なぜなら、「日常的」に必要なモノへの欲求は、モノが満ち溢れローン等の仕組みを備えた社会では、かたづけしから満たされ、モノの獲得そのものもはや生きる目的にはなり得ないからである。さらに成功を目指したとして、地球規模にまで拡大した生活世界では、目標そのものが超日常的な世界規模のものになり、凡人にとって、「夢」は「見果てぬ夢」として潰えることの方が多い。たとえば、「イチローのような人生なんて俺にはあり得ない」というような形で。

したがって、日々の暮らして仲間から認められ、受容されることこそが最重要の目標・課題となってくる。しかし、達成すべき目標でつながった人間関係ではなく、受容されることそれ自体を目的とする人間関係は、その

ことを重視すればするほど、関係の少々のみならずきよによってつらいものになっていく。そうしたなかで「人間関係がつかない。わからない。信じられない」という悩みが増幅されていく面があるのだ。

しかし、その種の苦悩を言語化し、可視的な形で上の世代に訴えることは容易ではない。なぜなら、親や祖父母たちが描いてきた人生の目的・課題は、「モノが満ち溢れ」「労働の不在」によって描かれるものであった。「窮乏の時代」に自己形成してきた祖父母世代にとって、「幸せ」とは、「人とのつながりの稀薄さ」や「生きる目的は何か」などを思い煩うことなく、「我を忘れてなりふりかまわず」働くことによって獲得できるものとしてイメージされている。さらに、高度経済成長期に自己形成してきた親世代にとっては、「3C(自動車・カラーテレビ・クーラー)時代」という言葉が象徴するように、「日常的な」モノの獲得そのものが「幸せな生活」イメージだった。つまり、大人世代にとっての目標や課題とは、「外的必要性によって規定された生活目標」に止まり、若者世代の生き難さには理解しがたい部分があるのだ。

●生きる力と親子関係

ところで、目標・課題にまつわるそうした深い悩みをもつたとしても、「他の誰もが見放しても、この人だけは、なにかんづく親だけ

は自分を見放さない」という確信があるとき、人は絶対的な虚無の淵に追い込まれることはなく、現実と折り合いをつけながら生き抜いていける。そして、こうした生きる力は家族の親子関係のあり方と大きく関わっている。しかし、この面でも上の世代と若者世代とでは大きく異なっている。

家族の親子関係の変化は、「昔の親は偉かった。それに対していまの親はだめになった」といった形で単純に比較できるようなものではなく、社会の豊かさのレベルに大きく規定されている。すなわち、現代の親たちは子どもを十分保護し、教育する力をもっているからこそ「教育的熱意」「子どもへの愛」そのものが、すでに指摘され続けてきた「過干渉」「過保護」という側面のみでなく、モノをめぐって日常的につくられている親子関係のあり方そのものの中に、子どもの自己肯定感の土壌を干涸びたものにする「家族愛」のパラドックスともいえるべき側面がはらまれている。溢れるモノは、親が子どもを思い、教育熱心であればあるほど、親子間のコミュニケーションをネガティブな性格をもつたものにしていきかねない。現代の子どもたちは、幼いときから驚くほどのモノに囲まれている。そういう状況下で、モノをめぐるどのような親子関係がつくられがちだろうか。まず、いまの子どもがどのくらいのモノに囲まれている

のかという一例を挙げよう。

次のデータは、「社会調査論」で学生が調べてきた二歳半の男児のおもちゃの種類と数である(一九九六年)。ミニカー系乗り物玩具類Ⅱ乗用車・トラックなど五一、電車一二、飛行機八、船一。人形類Ⅱぬいぐるみ四八、

ミニ人形・合計一九八(ウルトラマン一三〇、カーレンジャー二六、ビーファイター二五、仮面ライダー一四、それ以外三)。上記以外の人形七二。ボール類Ⅱ三九。楽器類Ⅱ一九。電話Ⅱ二。ゲーム板Ⅱ四。その他、次の玩具各一つずつⅡ三輪車、車、ブランコ、滑り台、ジャングルジム、ビニールプール、マジックマット。これ以外に教育用ブロック、ビー玉、刀、銃等を入れるとまだまだ増える。出生後二年あまりというのに驚くべき数量である。

こうした大量のモノをすでに子どもが所有しているとき、子どもが何かを欲しがったとして親はどう対処するだろうか。教育熱心であればあるほど、子どものことを大事に思えば思うほど、「甘やかしすぎにならないか」「モノを粗末にする人間にならないか」と考えるに違いない。その結果、子どもに対しては「同じものをすずでもっているのに」「我慢のできないだめな子」と反応してしまわないだろうか。親が教育熱心の親であればあるほど、モノを介在させた関係で親は子どもに対して、「我慢のできない子」「だめな

子」「欲しがり屋」という感情をもち、そして、子どもの中には親に対する「自分の望みを聞き入れてくれない怒りや恨み」「親に無理をいう悪い子感覚」「罪悪感」などが生まれ、両者の間にはネガティブな感情が生じがちである。

モノ溢れ社会は、「をを頑張つたらをを買ってあげる」という形で、モノが子どもを操作する手段として使われるだけではなく、モノをめぐる関係のなかで日々否定され続ける自分という形で、生きる力の根底をなす親から絶対的に受容されている自己感覚を蝕んでいく面をはらんでいる。それは、「窮乏の時代」の親たちが「何とかして子どもに腹一杯食べさせてやりたい」「継ぎの当たっていない服を着せてやりたい」といった形で、モノを介在させた親子関係をつくらざるを得なかった時代とは大きく異なるものである。

さらに、豊かな経済力をもった親たちは、幼い頃からピアノ、スイミングスクール、学習塾といった場に子どもたちを通わせる。そして、子どもの成績に一喜一憂する。家族の会話は、そうした場での成果にまつわるものが多くなる。そして、そうした家族の会話を通して、子どもたちは競争で勝ち抜くことによつてしか親の「愛」は得られず、それに失敗すれば見捨てられるのではないかという怖れを抱いていく。

親たちが無自覚のうちに伝えているのは、「がができたお前はよい子」「がができないお前は期待はずれの悪い子」という条件付きの「愛」である。しかし、子どもの自己肯定感を深く培っていくのは、何かに「成る」ことによつて得られる「愛」ではなく、「あるがままの自分」を「かけがえのない我が子」として受け入れてくれる無条件の「愛」である。しかし、子どものことを大事に思うからこそ、親たちは学校や社会での子どもの成功を願って、ますます条件付きの「愛」で子どもを追い立てていく。

こうしてみていくと、豊かな社会はそのパドックスとして、物質的豊かさの裏側にその「影」の部分として、未だ人類が経験したことのない精神性レベルでの問題を張り付けている社会だということが出来るだろう。したがって、貧しい社会に、もはや後戻りする道は選択したくないと私たちが思うならば、単純に「昔がよかった」「いまの子育ては成っていない」「若者は根性がない」といった懐古的な形で問題を考えるのではなく、この「影」の部分を見据えたいうえで、生きる価値や家族のあり方をどのようなものとして構築していくかが問われていると考えるべきだろう。

(かすがが きすよ・安田女子大学教授
著書に『家族の条件』岩波現代文庫